



# 人続相靈幽作贗

---

---

tontokaimo39

---

贗作幽靈相統人

面倒だった事件も無事解決、久しぶりに休みが取れたので夕子を誘った。

「ごめん恭一、私ちよつと都合が悪いの」

「そうか、なら仕方がないな」

私は官舎でゴロゴロと、TVを見たり週刊誌を読んだり一日を過ごした。どっちかの都合で休日でも会えないことはよくあるので、別に気になることは無かったのだが、その夜、夕子からのメールが来なかった、夕子の都合で会えなかった日には、

「今日何してたの？ゴロゴロしてると太るわよ」  
などと言うメールがいつも届くのだ。

次に誘った時の夕子の返事は少しおかしかった。

「私、今忙しいの」

「忙しい？何してるんだ」

「卒論よ」

「そうか、がんばれ」

はるか昔？と言うことになるが、卒論で忙しいのは私も経験済みだ、提出期限が決められているので時間に追われる、焦れば焦るほどうまくまとまらない。そうか、夕子ももうすぐ社会人になるのだ：うん！待てよ、彼女の卒論は昨年既に提出済みじゃあなかったのか、その後マーメイドの事件に巻き込まれたために四年生の後半、約半年ほどの間が登校ができず、単位不足のため、留年になってしまったのだ。

その翌日だった、

「お早うございます、そうだと宇野さん、昨日、あつ、

「い、いや」

「どうした？」

「い、いや何でもありません」

「こら原田、何を言おうとしたんだ？」

「いや、本当に何でもないことですよ」

「おいっ！はつきり言え！」

「し、しかし」

「しかしもおかしもあるか、言いたいことがあったのなら隠すな！」

「じ、じゃあ言いますが、昨日夕子さんを見かけたんです：M公園の散歩道で」

「何？」

「声をかけようとしたのですが、相手がいて…」

「うん？」

「若い男です、それが、二人は腕を組んでいて……」

「……」

私はさりげない風を装おうとしたが、動揺を隠せなかった。そうか、そう言うことだったのか：夕子は若いのだ、若いのだから若い恋人ができて決しておかしくはない、それは前からわかっていた、やがてはそうなるだろうと覚悟はしていた、いや、覚悟ができているつもりだった……

その後、夕子からは何の連絡もなかった、私も何もしなかった、とうとう、なるようになったのか：惨めだった、くそっ！惨めな気持ちになる自分が立った。

淳子から携帯が入った、

「宇野さん、夕子と何があつたの？」

「いや、何も…」

「本当？」

「ああ、本当だ」

「そう、それならいいんだけど…」

これでもう疑いの余地はなくなった、淳子も、夕子の変化に気づいたのだろう、原田と同じようにデートの現場を目撃したのかもわからない、私はイラついた日を過ごした。

宇野！お前は何歳だ！仕事は何だ！と、自分を叱りつけても、イライラと惨めさは治まらなかつた、携帯が鳴るたびに、夕子では！と思った、これはマ―メード事件で夕子が消えていた時もそうだった、

消えた夕子には会えなかったが、会おうと思えば会えないことはないだろう、しかし会ってどうする、惨めさが増すばかりじゃないか：

私は黙っていたが、やがて事情を察した原田や岸本は、夕子のことを一言も口にしなくなった、私に対する思いやりだとだとわかっていながら、余計にイライラがつのって他人には強く当たった、課長は少し休めと言ってくれたが、仕事は多い方がよかった、淳子もあの携帯以来何も言っていなかった。

夕子が、私の誘いを断った時から数えて、もう二月に近い日が過ぎていた、突然

「宇野さん、夕子さんと言う方からお電話！」  
と言う屈託のない明るい声が上がった、新たな配属



で来た若い女性刑事だ、彼女は夕子のことを知らない、

「何！」

署員が一斉に浴びせる視線を感じながら、私は受話器を握った、夕子はここのナンバーを知っている、しかしそれを使ったことは一度もない、私との私的な連絡は、全て携帯を使っていたからだ、

「お、俺だ……」

「恭一、私、結婚することにしたの」

「そ、そうか……」

「じゃあ」

「お、おい待て」

しかしそこで通話は切れた、夕子の声は、私の耳に、どこか遠い所から届いているように聞こえた、おそ

らく近くの公衆電話を使ったのに違いないが、いい話でなかったことを私の様子から察して、誰も、何も尋ねることはしなかった。

結婚式の招待状が届いたのは、電話から数日後のことだ、それは型通りのありふれたものだったが、余白に、「絶対来てね」と言う手書きの一言があった、振った男に招待状だと、何を考えているんだ！何が「絶対来てね」だ！私は引き裂こうとして、ふと手を止めた、夕子の顔を見るのはこれが最後か：私は招待状を引き出しに入れた。

式場は小さな教会だった、入ると数名の男女が小声で何かを話し合っている、何だ、ミス研のメンバ

「だけじゃないか、私に気づいた直子が、少し困った顔をしたもののすぐ笑顔になって手を振った、夕子の後見人だった永井氏の顔も、夕子に見合いを勧めていた叔母さんらしい人の姿も見えない、相手方はと見ると、中年間近といった感じの男性が二人だけだ。私が腰を下ろすと、隣に淳子が座った、

「お相手はね、母一人子一人で他の身寄りはないそうよ、そのお母さんも今は施設に入ってるんだって」淳子はそれだけをささやいたが、後は口を閉じてしまった、そうか、それで新郎側の出席者は二人だけなのか、納得はしたものの、私も口を開く気分ではなかった。

式が始まった、何やらオルガンの音がして、礼をしたり、立って歌を歌わされた、神父が何かを話し

たが、それらの全ては、私の耳も頭も素通りした、

夕子が、バージンロードを歩いて来る：綺麗だ！  
純白の花嫁衣裳の夕子、私はそれを何度も想像していた、今日の夕子はその想像を遥かに超えている、ミス研のメンバーから、歓声とため息が漏れた、「私はT大のマドンナよ」などと彼女はよく言っていた、それは自惚れた自称ではない、彼女は確かに美人なのだ、女性が最も綺麗に見える時、それは花嫁姿の時だ、その最も綺麗な夕子の姿を、私は、我を忘れて見つめた、これが夕子の見納めか：胸に浮かんだのはそれだけだった、それ以上のことは、私の内部の感情操作機構が全てを拒否してしまったのだ。

静かに流れていたバックミュージックが消えた、神父が、何か短い言葉を口にした、続いて

「貴方はこの女性を妻として、生涯変わらぬ愛を誓いますか？」

「誓います」

新郎は即座に答える、淳子が、私の手を握った、「落ち着いて：」と言うことか、「やめろ！」と叫びたい衝動に駆られたのは事実だ、若い時の私だったら叫んでいたに違いない、

「貴女はこの男性を夫として、生涯変わらぬ愛を誓いますか？」

私は固唾を飲んだ、私の手を握る淳子の手の力が強くなった、彼女の全身がこわばっているのを感じた、時が止まった、ミス研の席も咳一つあがらない、場内はシンとして静まり返り、全ての者が、次の一瞬を待った、夕子は答えた、

「いいえ！」

「な、なんと、なんとおっしやつた！」

「この方と結婚する意志はありません」

ミス研の席からワツと歓声があがり、続いて拍手が起こった、

「な、何を言う！」

二人いた男の内の一人が、恐ろしい形相で壇上に駆け上り、夕子に掴みかかろうとした、

「やめろ！お嬢さんに手を出すな！」

雷のような大声が響いた、犬上が仁王立ちになっている、夕子は頭のベールを取るとにっこりと笑って犬上に手を振った、続いて私に手を振った。

その夜、馴染みだったホテルの一室で二人だけに

なった、

「恭一、毎日焼餅に苛まされて狂ってたんでしょ、顔を見たかったわ、そうだ、今日の恭一の顔、もの凄かった、あんな凄い顔して取り調べをしたらどんな凶悪犯でも白状するわね、犬上さんぎりぎりでセーフ、もし遅れてたら私「誓います」って言わなければならなかったわ、教会で誓っても日本では正式の結婚にはならないわね、でも神父さんに嘘を言うのって気持ちが悪いじゃない」

夕子は一方的にしゃべっている、昼の緊張が解けたせいだろう、だが私には何のことか全くわからない、  
「そうだ、淳子に手を握ってもらってよかったじゃない、岸本さん来てなくてよかった、あつ、これは冗談よ、淳子ああ見えても本当はものすごくやさし

いの、今度のこと、淳子に蹴飛ばされても文句は言えないわ」

「おい夕子！いったいどう言うことなんだ？さっぱりわからないじゃないか」

「あつごめん、話すわ、少しややこしいからまず概略ね、白寿園老人ホームに木村さんと言う女性が入所してるの、老人ホームって、なんとなく暗いイメージだけどそこは違うの、金持ちだけが入ることのできる凄く豪華な設備のところ、木村さんは、そんな入所者の中でも一二を争う資産家なの、息子が一人いるんだけどその息子がぐうたらなダメ男で、いつも木村さんを悩ましてる、今日の式で私の夫になるはずだった男よ、その息子を利用して木村さんの資産を取ろうとしている者がいる…」



「うん？それに夕子がどう絡まる？」

「偶然だったけど、一人の女医さんに出会ったのね、子供の頃診てもらったこともあつて親しくしてた方」

「うん」

「最初はお互いに近況などを話し合ってたんだけど、やがて女医さんが少し変なことを言いだしたの」

「私が委託医をしてる老人ホームに木村さんと言うお年寄りがいるの、彼女は優しくいい人なのに癌に侵されていてもう末期の状態、入院してた病院を出てホームに帰っているのだけど、と言うことは、病院の医師から、もう手の打ちようがないと見放されていると言うことなのよ」

「ええ…」

「そんな患者さんに必要なのは、薬ではなくて、生きて行こうと言う意志なのね、ところが木村さんにはその意思を全く失っている、と言うのは可愛がってた息子さんがぐうたらで仕事もせず遊び呆けて、顔もほとんど見せないからよ、息子さんに絶望してしまってるのね。『息子にいい人ができて家庭でも持つてくれたら：私には少ないけど資産がある、それを譲って喜ばせたいのに：今そんなことをしたら、息子はもっと悪くなるだけ、資産は福祉関係に寄付でも：』と言うのが口癖になってるの」

「はい…」

「実は以前にそこで自殺した人がいるの、生きることを諦めてしまったのね、まさか木村さんそこまで」

はと思うのだけど…」

「お金があっても幸せな老後とは限らないのですね」

「そう、そこで考えたのよ、息子さんがね、女性と仲良くしている写真でも見せて、ほらおばあさん、息子さんにはいい人がいるのよ、やがて結婚するんじゃないかしら、そうすれば可愛いお孫さんの顔を見ることができるのよって元気づけたらと」

「ええ…」

「息子さんにね、お母さんはもう長くはないと話すと、さすがに驚いて私の提案を受け入れた、でも彼には相手がないの、そこで夕子さんをお願いがあるの」

「はあ？」

「息子さんの、仮の恋人になっていたただけたら、いや、写真だけでいいの、その写真を木村さんに見せたら、生きたいと言う気持ちが生まれるかもわからない、木村さんに嘘をつくことになるのはわかってるわ、その嘘を貴女につかせてしまうことも、怒ってもいいのよ、でも木村さんは長くはない、絶望のままではなく穏やかな気持ちを持って旅立ってもらえたらと思うの、所長さんもそれはいい考えだつて」

と、言うことで木村さんの息子と一緒に写真を写したの、親しそうに話してるところ、腕を組んで歩いてるところなどね、キスしてるところは写させなかったけど」

「うん？で、したのか？」

「バカ、私はそれで済んだことと思ってた、ところ

が数日たって変な封書が届いたのよ、開けて見ると、その時の写真と妙な手紙が入ってた『お前は木村と結婚しろ、しなかつたら子どもを殺す』子どもって？と思って写真をめくったら子どもの写真も入ってたわ、小学校五六年の女の子、可愛そうに縛られているの『子どもは身寄りのない子のための施設を逃げ出した子だ、今、写真のようにある場所で監禁している、お前とは何の関係もない、だからお前がどうしようと勝手だ、しかしお前が木村と結婚しないなら子どもを殺す』って言うのね」

「何だと！脅迫か」

「まだあるの、『お前が警部と付きあっているのはわかっている、彼には、新しい恋人ができたから別れる』って、彼だろ」と誰だろと、警察関係者が少

しでもこの件にかかわっているのを感知したら子ども  
もの命はない、これもまたお前の勝手だ、彼に相談  
するなり助けを求めるなり好きなようにしろ、しか  
しその時は子どもを殺す』と、その後には私と恭一  
の最近の様子をこまごまと書いてあるの、お前たち  
の様子はすぐわかるぞと言う脅しね、女医さんから  
木村さんの口癖と言うのを聞いてたから、なぜ私に  
結婚しろと言うのかはすぐわかったわ、木村さんの  
財産が狙いね、私は腹が立った、子どもを使う卑劣  
さに加えて、私の人格を秤にかけようとしてること  
じゃないの、だからすぐ恭一に伝えようと思ったの  
だけど、万一：と違って、私たちを尾行してるんじ  
やないか、もしそうだったら：そこでコーヒーを飲  
みに行くふりをして犬上さんに相談したの、子ども

を監禁してるって言うのが嘘か本当か、まずそれを確かめたかったの。

これは意外と早くわかったわ、犬上さん、かつて仲間を動員してくれたのね、子どもがいなくなつて探している施設があるが、体面だろうが、警察には届けていないと言うの、いなくなった子どもの性別と年齢も写真の子どもと一致して、監禁は本当だと言うことがわかったわ、だけどそのために恭一にはよけいに話せなくなつてしまつたのよ」

「脅迫文の届いた数日後、息子の木村からデートの誘いがあったわ、二人で写真を撮った時は楽しかった、これからも交際してもらえないかと言うのね、私はそれに応じた、これは木村も脅迫者と関係があると思えないでしょう、もしかしたら脅迫者自

身かも、私と結婚することによって母親の資産をもらいたい、そのために自分で木村と結婚しろなどと言ふ文を書いてね、ともかく付きあつていれば何かを探れるはずだと思つたからよ。やがて子どもの監禁は事実だとわかつた、これは一人で出来ることではない、自作自演でないなら仲間？しかし資産がもらえる本人がというのもおかしい、そうか、彼も脅かされているんだと気づいたわ、だとすると私と違つて脅迫者を知っているはず、うまく行くと彼から脅迫の相手を聞き出せるかもと」

「うん」

「そこでお色気作戦」

「何だと？」

「フフ、変なこと想像しないでよ、私の方が積極的



だと言う振りをして誘惑したと言うこと、キスしたことも無いから安心して、こんな時美女は便利ね」

「おい」

「何度か付き合った後、貴方本当は誰かに脅かされてるんでしょう、私との交際はそのためね、と迫ると『い、いや、本当に好きだ、嘘じゃない』って言うから、私貴方と結婚してもいい、でも貴方が本当のことを話してくれないのなら：と言うと脅迫を認めて、二人の名前を挙げた、一人は老人ホームの職員で上田と言う男、もう一人は児童保護施設の下畑、予想通りね、女医さんに頼まれた写真を手に入れられる者、それに木村さんのことを知っている者といえどホーム関係者に違いない、それから施設を逃げ出した子どもを監禁したと言うのも、私の脅迫とタ

イメージが良すぎる、子どもは逃げ出したのじゃないかと、職員の誰かが連れ出したに違いないと予想してたの、それが式に出てたあの二人よ」

「私が木村と交際してるのは、彼を好きになったからだとも思ってるの、バカラシイ！それとも子どもを殺すと言う脅しを気にしてるのだとでも、殺したければ殺せばいいじゃない、私には何の関係も無い子なんだからご自由にどうぞ！まあ、あんたたちの目論みはパーになってしまおうでしょけどね」

「お前、何がしたい、分け前か？」

「そう言うこと、木村からいくら取るつもり？」

「一億だ」

「木村、親からいくらもらえるの？」

「六億と聞いててる」

「ふうん、結構もらえるのね、よし、木村と結婚するわ！その後彼を消せば六億全部私のもの！」

「お、おい！」

「お前恐ろしい女だな、かわいい顔をしてるくせに」  
「今頃わかったの、あんたたち脅す相手を間違えたのよ、でも六億もあるのに一億なんて、いやにお行儀がいいじゃないの」

「それ以上だと彼が承知しないからな、なに後で」

「そうか、利口なやり方ね、わかったわ、私もとりあえず一億の三分の一、後で取れるんだからいいじゃない、いやなら木村とのお芝居はここまで」

「と言うわけで、二人に仲間だと認めさせたのよ、

それから、早く結婚しろと急かすのを、こっちにも都合と言うものがあるのよと引き伸ばした、犬上さんが子どもを助け出してくれるまでの時間稼ぎね、子どもがどこにいるのかは、さすがに二人ともしやべらない、私もじっと待っていられなくて、できるだけ多く二人に接触して、ヒントになりそうなことを聞き出そうとした、何かを得られたら、それを推理して犬上さんに伝えた、犬上さん必死で探してくれたわ、ところが勝手に式の日取りを決めてきた、おまけに招待状まで作って、木村が承知したからと言うの、それまで拒否すると怪しまれると思つて承知したのが今日の華麗なる、かつ恭一の悶々とした顔が拝めた記念すべき式典」

「おい、相変わらず：じゃあ夕子が脅されているこ

とを話したのは犬上だけか？」

「犬上さんと彼の仲間にはね、彼らは口が堅いの」

「淳子やミス研のメンバーは？」

「淳子には話しておこうと思って、ところが話の途中で邪魔が入ったの、淳子勘違いしてしまっただけ、それ以後受けつけてくれなかったのよ、蹴飛ばす他に夕子にはもう用がないって、でも出席してくれた、多分私のためにと言うより：恭一、淳子が好きになったのじゃない」

「ああ、以前よりぐっと好きになった、凄い人だ」

「ラーメン何杯おごられるかしら、ミス研のメンバーね、私が結婚すると言う情報をどこからか得ていたの、きつとあの教会からだと思うけど、恭一との結婚だと思っておめでとうと言うので違うと言っ

たらみんな驚いてた、直子に『もう先輩が信じられなくなった』と泣かれたのには弱ったわ」

「そうか、直子もいい子だからなあ」

「恭一、淳子や直子をいやに褒めるのね！メンバーには式には来ないでと言ったの『そうはいきません、夕子先輩の花嫁姿を見ないなどと言うことを許す神様がこの世にいるでしょうか』なんて、やはり美人は…」

「おい、おい、しかし『誓いますか』と聞かれた花嫁が『誓いません』と言う結婚式など映画でも見たことが無いぜ」

「それを聞いた時の恭一の顔、悪夢の中でも見たことが無かった、でも恭一、事件はまだ終わってないわよ！」

「この件、黒幕がいるわ、私宛の脅迫文の書き手よ、あの文は異常だった、狂ってるの、子どもを殺すことなど何でもないような人格の持ち主を思わせる、私が本気で子どもを心配したのはそれなの、上田と下畑の二人は、会ってすぐわかったけど、二人に他人の子どもを使って脅迫するような発想は無理ね、それに子どもを殺すなんてことできるはずがない、二人は思ってたほどの悪党ではなかったわ、ねえ、私が他の男性と交際を始めて、恭一が焼餅焼きかけたこと、今までも何度かあったでしょう、でもその理由をいつも早くから話したはずね、今回話すことを最後まで躊躇してしまったのはこの黒幕の存在を感じていたためよ」

「確かにそうだったな、それが無いから…」

「焼餅は焼けに焼けて黒焦げになってしまった」

「正直なところ、まあな」

「そうだ、冗談言ってる時ではないわね、私はこの黒幕を絶対に許せない」

それから三日後、二人で木村を訪ねた、もちろん息子の方だ、

「結婚できなくてごめん」

「ああ、ああ…」

「でもお互いに嘘をついたのだから」

「何？俺は約束通り上田と下畑のことを話したじゃないか、それにあんたに会せやし」

「そのことだけはね、で、二人に一億も渡すなんて、貴方を脅かされてたの？」



「たいしたことじゃないさ、一億には俺も驚いたが、まああれこれ言われて面倒が起こるよりそれだけで済むのならと」

「お母さん、資産が六億あるって貴女に話したの」

「いや、一度も聞いたことはない、信用されてなかったから」

「じゃあどうして知ってたの？」

「二人に聞いたんだ」

「一億取られたら残るのは五億ね、残りの方は誰に払うの？」

「何だと！」

「五億も払わなければならぬことって、何したの？」

「お、俺は何も…」

「貴方が嘘をついてると言ったのがこれよ、言えないの、私も言いたくないけど仕方ないわ、貴方はお金が必要だった、弁護士を通してお母さんから送られてくる月々の額では足りないお金が、その時も何かをしたんでしよう、交通事故を起こすとかかなにか、そうだあのホームにいるのは金持ちばかり、それもほとんどが女性、宝石などを持っているに違いない、そう考えた貴方は、お母さんのいるところへ出かけた、第三者の出入りのチェックは厳しい所だけど、貴方は入居者の息子、簡単に入れるわね、そして適当な人の部屋へ入って金目のものを探していた、ところが帰るはずはないと安心してたのにその部屋のお年寄りが帰って来て、貴方の行為を見てしまった、その日は慰問の演芸会でみんな一階のホールに

集まっているはずだったのに、我を忘れた貴方は、そのお年寄りを車椅子のままテラスへ押し出し、抱き上げて……」

「やめろ！やめてくれ！あのおばあさん夢に出て来るんだ……」

「ねえ、私は貴方のしたことを暴いて告訴する気はないの、許せないのはそれを種に貴方を強請っている人よ、私も脅かされたんだから、私、推理することは大好きだけど、他人の秘密をほじくり出して喜んだり罰を受けさせようなんて気はないわ、この人宇野恭一、警視庁の警部だけど、今日は私の気持ちと同じだと思う、そうでしょう恭一」

「ああ、もう自殺として処理されたことだ、再調査しろといわれても無理だな」

「ねえ、貴方を脅してる人誰なの？」

「し、知らない、本当なんだ、あんたと写した写真を入れた手紙が来た、手紙には、『この写真の女と本当に結婚しろ、そうしたらお前は母親から資産を譲ってもらえる、いい話ではないか。嫌なら嫌でいい、だがその時はお前のしたことがバレル』と書いてあった、誰から来たのかはわからない」

「それ本当なのね、それで私に交際を」

「ああ、だけど脅されたからじゃない、あんたと一緒に写真を撮った時から好きになっっていたんだ…」

「そう、ありがとう」

「恭一、木村のことどう思う？」

「信じていいだろう、脅しの相手は金を出せと言っ

ていない、まず木村に親の資産を継がせ、目的はその後でと言うことだろう、かなり頭が切れる悪辣な奴だ」

「自分の名前は伏せ、脅しで相手を操る、多分上田と下畑も同じことをされてたんじやないかしら、二人も何かの弱みで脅かされ、いいように踊らされていた、だけどその相手はわからない」

「それじゃあ逃げた二人を探し出しても」

「そう、でも実は私、誰が黒幕なのか見当はついてるの」

「何だと、どうして？」

「木村さんの資産のことを知ってて、私と木村に送り付けた二人の写真を手に入れることが出来る」

「ホームの関係者だな」

「そうすぐわかるじゃない、その一人が上田だったけどもう一人」

「となると：夕子に写真を撮らせた」

「まさかと思いつながら考えたわ、女医さん、木村に資産を継がせてもその後どうするんだろう？と、初めはそれがわからなかったけど：」

「木村の老人殺しを知っていてそれを種に」

「そうね、まあ二日後に確実なことがわかるわ」

二日後ホームを訪れた。

「永井さん、私の勝手なお願いのためにとんでもない迷惑をかけてしまったのね、どうお詫びしていいか：」

「いいんです先生、私はなんとも思っていないです」

夕子が言っていた女医だ。

「でもほんとうにごめんなさい！」

「私、先生のお役に立てて嬉しかったのです、お氣になさらないで」

「木村さん喜んでね、見違えるほど元気になって：でも高齢だったせいか、やはり癌には勝てなかった」

「えっ！じゃあ」

「今昏睡状態、また病院に入ってるのだけど時間の問題なの」

「そうなんですか」

「そうだ、弁護士さんちよつと残念がってるわ、一度書いた遺言を書き直したいって、でも間に合わなかったのだそうなの」

「そうですか、と言うことは？そうか…」

「何なの？」

「いえ、ちよつと、先生、本当にもうお気になさらないでくださいね」

女医と別れると所長に面会を求めた。

「うちの上田がとんでもないことをやって、貴方にはどう謝ったらいいか」

「いくら謝ってくださいっても、私は許しません」  
「な、何？」

「私を脅して木村と結婚をさせようとしたのは貴方ですね、私を秤にかけて苦しめ、宇野警部や友人知人に嘘をつくように強要し、だから私はみんなにとんでもない心配をかけてしまった：でも一番の被害者は貴方に監禁された少女ですね、許せるわけがないでしょう！」



「何を言いだすのですか、私には何のことかわかりませんが」

「貴方は木村さんの遺産が欲しかった、木村さんは施設に寄付をと言ってるので、それならここへと期待したのでしよう、でも木村さんの意図はもつと貧しい人たちの施設ということだった、木村さんは息子が結婚するなら息子の方へと言ってるのを思い出した時、女医さんが木村さんを励ますことについて相談に来た、貴方は、そうかそれなら二人を本当に結婚させればいいと考えた、木村の方は脅すことでどうにでも出来る、木村の行為を見てたんでしよう、でも黙っていた、警察は自殺と判断したが、話す必要はない、これは何かに使えろと、木村は自由に出て来ても、私には出来ない、そこでこれまた弱みを握

っている下畑に子どもを連れ出させて脅しの種とした、上田は、貴方の隠れ蓑ですね、もし私が騒いでたくらみが漏れるようなことになったら彼の仕業にすればいい、彼は今逃げているからちようどよかったですと思ってるのじゃないですか」

「何とも貴方は変わったことを言われる、何を根拠に？」

「根拠ならあります、木村さんの資産額まで知っている人は、木村さん本人、管理を委託されている弁護士、そして貴方、新しい入居者がある場合、家族や親戚の様子、そして財政状態などを調べるでしょう、これは極秘扱いされるものですから、弁護士でさえ何の疑いもなく貴方に報告する、木村ね、お母さんから聞いたことはないって、ところが上田や下

畑は知っていた、誰が教えたの、教えると言っても脅迫文に書いたものでしょうけど、弁護士のはずはないとすると、貴方としか考えられないでしょう、木村さんが書こうとしていた遺言の内容まで知ることが出来るのも、弁護士以外は貴方だけ、なのにこれも上田や下畑は知っていた」

「なるほど、理屈だけは一応通っているように見えますな、しかし証拠も何もないでしょう」

「ところがあるのよね、貴方が私にくださった脅迫状よ、私ね、不審な物が届いたらすぐ手袋を着けて念入りに調べる癖があるの、何しろ警部を恋人に持っているんですもの、貴方はいい油断をされた、私のようなことをする女性って珍しいでしょうから、写真や手紙の指紋を調べたら、べたべたと付いてた

んですよね」

「ふん、それが私の指紋だとどうして？」

「私が女医さんの紹介でここへお邪魔した時、貴方はパンフレットなどの書類をくださったわね、素手で掴んで」

「何だと！」

「あの書類や写真、鑑識で比較してもらったの、そうしたら全てが一致しているって、写真は女医さんが入れて置いたパソコンのデータを使ったんでしよう、だから貴方以外の指紋はついていない、今日私たちがおじやましたのは、鑑識の結果が出たためよ、貴方には警視庁に出頭するようについて通知がまもなく届くわ」

「チ、チクシヨウ！キ、キサマ何て野郎だ！」

「あら私、野郎でなくて女性だけど」

「夕子、もしあの時子供が助けられていなかったらどうするつもりだったんだ？」

「神父さんに『誓います』って言って結婚してたわ、結婚したからと言って一緒に暮らすことはないし、事件成り行きのタイミングを計って離婚すればいいじゃないの」

「しかし…」

「私には離婚歴ができる、でもそれと子どもの命のどっちが大切かしら、だから離婚歴などいくらあってもかまわない、それとも恭一、結婚は離婚歴が出来た私とじゃ嫌？」

「うん？おい今何と言った！」

「あつ、失言！取り消し」

「おい…」

「フッフ、事件解決で気が緩んだせいかしら、ねえ  
恭一、本当にごめん、一課のみんなにも淳子や直子  
たちにも：私はみんなを騙してるんだと思うと辛か  
った」

「仕方無かったんだからいいじゃないか、夕子を責  
める者は誰もいない」

「それにもう一つ別の心配もあつたの」

「うん？何だ？」

「恭一がね、新しい恋人つくるんじゃないかと」

「たった二月だぜ、マーメイドの時は半年も待った  
じゃないか」

「あれは私が行方不明だったからでしょ、でも今度

は私が恭一を振ったのよね、振られた男が新しい恋人をつくっても批判する者は誰もいない」

「おい、俺は振られたからと言ってすぐ新しい恋人をつくるような男に見えるか」

「あっそうか、なあんだ心配することなんか無かつたんだ！いくら新しい恋人が欲しくても、恭一じゃ無理だもん」

以前と変わらない夕子のカラカイを聞くのは嬉しかった、だが覚悟の方は限り無くしぼんだ。

了